

## 旧「修身教授録」全五巻の序文

昨春四月、遠く新京なる建国大学教授の任におもむかれた、われらの恩師森信三先生が、わが国の教育界の一隅に残された偉大な業績は、それが本質的であるだけに、いまだ十分に世人の知るところとならぬが、この複雑繁多な現代の時代と世相の下にあっては、容易にその比を見出しがたい種類のものと思われる。そしてその趣の一端は、まずこの一連の記録を通して窺いうるであろう。

そもそも教育の真谛は、師弟が同心一体、真摯に求道の一路を歩むところに見られるが、しかも師の深大な自証の光が、一転して化他の光となり、深く子弟の心魂に徹するとき、それは必ずや何らかの形態にまで、結実しなければやまないであろう。かくして古来、時の古今洋の東西を問わず、いやしくも真教の行なわれるところ、そこには期せずしてその記録の伝わり存するものがあるのである。かの孔子における「論語」、基督における「聖書」、さらにわが国では二宮尊徳翁の「夜話」のごとき、何れも真実語があって子弟感動し、景仰の念きわまって、ついにその言動を録するに到ったものであって、後人もまたこれを愛読尊重して、その偉大なる精神は、脈々として時代をつらぬき、永く教学を維持するのである。

今この書は、先生が数寄なる命運の下に、聰叡の資を内に包んで、十有余年の長い歳月を、師範学校の一教師として歩まれた、先生の下学のあゆみの忠実な記録ともいうべく、その外見からはあくまで懇切平明、志学の念の未だ発しない年わかい生徒たちを相手に、訥々（とつとつ）として説いて倦まない趣を彷彿せしめるが、しかもその根柢にいたっては、まさに哲学者としての先生の、深奥なる世界観人生観に基づくものというべきであろう。随ってこの書は、真の意味における「国民教育者の道」であるとともに、また実に現代の新なる形態における「人となる道」とも言いうるであろう。

本書の刊行は、最初は本会を中心として、直接先生の教を受けた少数同志の間に頒つ予定であったが、たまたま奇しき因縁によって、はからずもわが国国語教育界の第一者たるのみならず、明治以後国民教育者として、初めて一道を開かれた芦田恵之助（あしだえのすけ）先生の知られる処となり、ついにその絶大な御厚情により、同志同行社を通して、広く全国有縁の人々に頒たれることとなったのである。思えばこの記録も、如上芦田先生の御懇情がなければ、かくも早く世に出ることは出来なかつたであろう。同時に刊行の議ひと度決して先生に許しを請うや、先生には渡満早々のご多忙中にも拘らず、丹念克明、じつに厳正を極めた補訂の筆を加えられ、ために内容に一段の精彩を加えて、全巻が真に珠玉の感を深からしめるものがある。人はこの記録に向うとき、そこにおのずから師弟の真情に触れ、人生の真意義を観じて、思わずも襟を正さしめられるものがあるであろう。

今や大方の支援を受けて、この書の刊行の成ることにより、これまで主として撰・河・泉の地に局限せられていた先生の精神が、わが国の国民教育界を照らすに到るならば、その喜びは、ひとり偶縁につながるわれら少数者の本懐たるに留まらないであろう。同時にわれわれは、この書を通してその教に敬慕の情を寄せられる人々に対しては、単に先生の婆心化他の業としてのこの種の下学の記録のみでなく、さらに進んで、先生の上達の歩みとしての「恩の形而上学」その他の思想的高峰にむかって、登攀（とはん）の一步を踏み出されんこと洵に切望に堪えない。尚最後に謹記すべきことは先生終生の恩師たる西晋一郎先生には特に吾等の微衷を容れ給うて親しく題字を賜り、以てこの記録の巻頭を飾り得たることはその高教の末流に浴する者として洵に無量の感慨である。

皇紀二千六百年元旦  
斯道会

これはおそらく山本正雄氏の文章であろうかと思うが、いかに森信三先生の講義を聴いた生徒諸君が、先生を敬仰しその講義記録について、真摯にその広布を期したか、その情熱はゆるぎないものだったかが分かる。

（臂 繁二）